

モデル事業名	四万十川・RIVER会員制度を活かした地域資源活用プロジェクト
活動団体名	株式会社 四万十ドラマ
ホームページ	<a href="http://www.shimanto-drama.jp/">http://www.shimanto-drama.jp/</a>
所属/ 担当者名	佐々倉 玲於
連絡先	0880-28-5527、 <a href="mailto:leosasakura@gmail.com">leosasakura@gmail.com</a>
活動地域	しまんとがわちゅうりゅういき とおわ たいしょうちく げん しまんとちよう にしときちく げん しまんとし 四万十川中流域 (十和・大正地区(現・四万十町)、西土佐地区(現・四万十市))

### ● 活動地域の概要

当該地域は、四国・高知県の四万十川中流域に位置し、合併以前は、十和村・大正町・西土佐村と隣接した市町村であり、それぞれの地域住民が連携し合い、地場産品の商品開発などを行ってきた。(当社は、これらの地域の住民が出資し、第3セクターからスタートし、現在完全民営化し、自立的に運営を行っている住民株式会社である。) 現在では、市町村合併が行われ、十和村(人口3315人・世帯数1262)・大正町(人口3124人・世帯数1204)は、近隣の窪川町(人口14021人・世帯数5766)(平成18年現在)と平成18年3月に合併し四万十町(人口20264人・世帯数8822世帯)(平成21年現在)となり、西土佐村(人口3668人・世帯数1436人)は近隣の中村市(人口34115人・世帯数14523)(平成18年現在)と平成17年4月に合併し四万十市(人口37917人・世帯数15360)(平成17年現在)となっている。

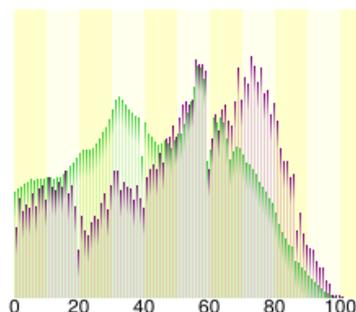
四万十町は、町域は東西43.7km、南北26.5km、総面積642.06km<sup>2</sup>あり、そのうち林野が87.1%を占め、田畑は4.8%を占めるに過ぎない。集落の多くは四万十川とその支流の河川沿いや台地上にあり、一部は土佐湾に面する海岸部がある。高齢化率は約35%で、下グラフの通り、20代~40代の若者・子育て世代は全国平均に比べ倍近く少なく、都市部や県外へ流出していることが伺える。



▲位置図



▲地域の様子



←四万十町と全国の年齢別人口分布図(比較) 紫:四万十町、緑:全国(出典:フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』)

### 活動地域の課題

このような山間の過疎集落であり、集落間の距離も離れていることから、人と人とのコミュニケーションをとる機会が減っている。そして、地域内の人口は減少し、暮らす人々自身も年を取っていく中で、心理的孤独感や閉塞感と、将来、集落がなくなるかもしれないという不安感、危機感を持ちながら生活をしているという現状がある。

しかし一方で、当社に関わる株主・生産者のように意欲的な地域住民は存在しており可能性がある。これら意欲的で元気な人々の取り組みや存在を情報発信し伝え、地域内のコミュニケーションを増やし、地域内の人々を刺激し、「不安感」を「安心感」に変え、地域全体で様々な地域づくり活動を行っていくような気運を高めていく必要がある。

地域内で生産される農産物については、商品開発されているが、交通の不便さのハンデもあり、販路開拓・拡大を行っていく必要がある。そのためには、地域外とのコミュニケーションの機会も増やし、信頼関係をつくっていく必要がある。

### ● 活動の内容・平成21年度

#### 活動①：コミュニケーション手法開発に向けた社会実験

どのような地域情報を地域内の人々に届ける必要があるのか、また、地域外の人々にどのような地域情報を届けたら地域の魅力を伝えられ、次のアクション(地場産品を購入するなど)に動いてもらえるのか、リサーチ・分析を行う。次に、届けるべき地域情報を、持続性を担保しながらどのように収集していくのか検討を行う。また、収集した情報をどのように発信していくことが有効な方法となるのか検討を行う。

#### 活動②：人材の配置した積極的な情報収集・発信

活動①の社会実験のプロセスの中で、コミュニケーション(情報収集・発信)の手法を考え、実践していくための人材を配置する

### 活動③：人材育成の方法の分析・開発

活動①、活動②の活動プロセスを追いかけ、分析し、地域内のネットワークを構築するために必要な要素とノウハウを抽出する。また、地域の中で中間支援的なポジションのコーディネーターを育成していくための方法論を見出すべく、地域にネットワークを持たない人材(UI ターン人材)を配置し、本プロジェクトを実施し分析を行いまとめる。

#### ● 活動の成果・平成21年度

### 活動①：コミュニケーション手法開発に向けた社会実験

地域のキーパーソンとなるような方々と出会い、コミュニケーションをとりながら、イベントでの展示・メルマガの発行・地域外での産物販売など行っているところである。中でも、地域の若者を中心に取り組み始めた「きき合う、しり合う、みんなで作る広報誌」づくりの今後期待できる。一方的に情報を発信するのではなく、地域の人々に聞きながら、地域の人ができるだけ関わってつくる広報誌をつくらうとしており、そのプロセスがすでに地域内に新しいコミュニケーションを生んでいる。



上) 広報誌づくり呼びかけチラシ  
下) 広報誌づくりの様子

### 活動②：人材の配置した積極的な情報収集・発信

計画申請段階では、配置された人材が地域情報収集・発信とプロジェクト全体のファシリテート・マネジメントを積極的に動いて行うイメージであったが、地域情報収集・発信について、当然ではあるが一人で動く範囲には限界がある。そこを無理して実施するのではなく、その部分は地域の人々に任せ、プロジェクト全体のファシリテート・マネジメントコーディネーターに専念し、地域の人々が積極的に関われる仕掛け・仕組みをつくっていくべきであることが見えてきた。



### 活動③：人材育成の方法の分析・開発

現在、上記の活動を実施しながら、客観的な視点を持ち、地域にネットワークを持たない人材が、どのように地域に関わり、人と人のコミュニケーションをつなぐコーディネーターとして機能できるようになるかの参与観察を行っているところである。見えてきていることとして、**①地域の前に所属組織内**：地域に関わる前段のプロセスとして、コーディネーターが所属する組織内におけるスタッフ同士のつながり・信頼関係ができなければ、組織外へのネットワークは広がりにくい。組織内のスタッフも地域の間人である。このスタッフとのコミュニケーションがうまくとれ、信頼を得られていなければ、仕事も任せてもらえず、組織やスタッフがすでにつながっている地域の人々を紹介してもらうことができない。一方で、信頼関係をつくることができれば、短期間で多くの地域内外の人々とつながり、信頼関係をつくることできる。**②事業事務局がつながりを広げ・深める**：何の取り組みがない中で、地域の人々と出会っていくことは意外と難しいことがわかった。しかし、地域の人々が多く関わる事業・会合等の事務局を担うことによって地域のキーパーソンとなるような人々と出会うきっかけとなり、つながりを広げ、深めることができることも見えてきた。**③コーディネーターも人材育成できる**：本人の資質に左右されることも少なくないと思うが、コーディネーターという役割を担う人材も、戦略的に機会を提供し、スキルを身に付けさせていけば、地域や組織の中に、戦略的に育成していくことが可能ではないかと考える。

#### ● 今後の課題及び展望

##### ・課題

これまでの取り組みから、組織が地域に持つ既存のネットワークの確認や、地域内のコミュニケーションが不足している現状を再確認できたと考える。ここからさらに広げて、取り組みを継続・展開することで、これまでつながりのなかった人や組織とつながり、地域内のコミュニケーション機会を増やしていく必要がある。また、コーディネーターやそのポジションが持続可能な形で組織の中に残っていくような資金調達方法を考え、仕組みづくりを行っていく必要がある

##### ・展望

今回の活動を通して、組織とつながりが薄かった地域内の「若者」や「社協」「学校」などの地域の人々の暮らしを支える機関の人々でつながり始めている。これまで地域産業に関わる人との関係性が強かった組織ではあるが、そこから展開して、地域内における新しいつながりをつくりながら、次の事業開発や組織づくりを検討している。